

Title	紅樓夢考(一)
Author(s)	金子, 二郎
Citation	大阪外国語大学学報. 6 p.97-p.108
Issue Date	1958-04-01
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80138">https://hdl.handle.net/11094/80138</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 紅 樓 夢 考 (一)

金 子 二 郎

紅樓夢小説膾炙人口、已經有好些年。但是多半讀者不但不甚明瞭其宗旨、書中所写的各項情節各種事物也多有莫名其妙。只以為其不甚明瞭、莫名其妙之處就是紅樓夢之妙處了。前年在中国發動了《紅樓夢研究批判》、各種關於紅樓夢之新的研究、新的解釈、新的主張陸續的發表了。這個風潮聳動了中国文芸界思想界、新的文芸理論的建設上、文芸評価標準の確立上有了很大的貢獻了。但是、我以為文芸小説の研究上、原有兩個不同方向的問題。一個是外的問題、就是關於文芸理論、小説讀法以及某種小説の解釈、評價の問題。一個是内的問題、就是關於某種小説裏所写的一切情節、事物的問題。内的問題不得解決了、外的問題無法説及、說什麼也不過是沙上樓閣了。内外總要拼合、這纔可以説完全的研究了。所以説、紅樓夢研究上現在最要緊的是從速鞏固基盤工作——内的研究。中国的紅樓夢研究批判、刺戟了我、我閱看這種論文等好幾篇、自己也漸々の回復当年對紅樓夢の興趣了。好、我也來一個！先正名再從版本問題説起。

---

紅樓夢という小説は、問題の多い小説である。これほど多くの人に愛好せられ、論議されながら、これほどわからぬことが多いということ自体が、考えるに価することでもある。先般中国の文芸界・思想界を聳動した紅樓夢論争も、紅樓夢をどう評価するか、紅樓夢をどう読むか、乃至は俞平伯の“紅樓夢研究”の批判から発して、古典研究のあり方、文芸批評の方法など、いわば紅樓夢の外をめぐる問題については、かなりの貢献があったことは否定できないが、紅樓夢それ自体の問題、紅樓夢内部の問題については、あまり論議されていない。これでは以前のいわゆる「紅学」が、徒らにモデル論議に終始し、「新紅学」が個人の趣味と感傷に墮したのを非難して、代りに紅樓夢の人民性をもち出したに止まり、紅樓夢研究を全盤的に推進したことにはならない。もちろん小説研究が、名物考や文章・用語の解釈、あるいは書誌学的な研究だけに止まってしまうならば、それでは不十分であることはいうまでもない。しかしそれらの基礎的ともいふべき研究を抜きにして、テキスト自体すら不確定のまま、小説の評価を行い、作者の精神を説くならば、それは些か沙上に樓閣を築くに似たことではないか。紅樓夢に出てくる器物・衣料・食物・花鳥

など、われわれにとってはわからぬことが多いし、家屋の構造・地理などにも疑問は多い。中国ではかなり調査研究をしている人があると聞くが、早くその結果を知りたいものである。さらにこの小説の文章・用語も、当然研究さるべくして、まだそのまとまった報告は出ていないようである。この小説の文章を例にとった語法研究は中国にあるが、それは必ずしも紅樓夢の文章研究ではない。もっと根本的なこととして、作者について、またこの小説の成立についても、今日すでに十分考えつくされているとは思えない。ぼちぼち材料が出揃った程度の段階であろう。また古い抄本が最近複製されて出たりしているが、いくつかある抄本・刻本についての比較検討は、ほとんどまだなされていない。いまだに紅樓夢には一般に認められた定本といえるものがないということは、むしろ不思議を通りこして、滑稽なことですらもある。徒らに品定めの声のみ高くて、吟味不十分というのが、紅樓夢研究の現状であろうか。わたしは、現在の紅樓夢破究にとって、緊要なことは、基礎的研究、すなわち紅樓夢自体の問題、紅樓夢内部の問題について、もっと積極的に調査・研究を進めることであると考え。わたしの研究は、こういった内部の問題を解明するためには、資料の不自由もあり、問題を掘り出す程度にしか達しえないのではあるが、とにかくその内部の問題から着手して、外部の問題に及びたいと思う。版本の問題、作者の問題からはじめたいが、まず何よりも名を正さなければならない。

「紅樓夢」はいつのころから「紅樓夢」とよばれるようになったのだろうか。現存の古い抄本では全部「石頭記」となっているらしい。脂硯齋重評石頭記のように。ところが120回刻本になると、「紅樓夢」になっている。最初の排本である乾隆辛亥本は書名は「紅樓夢」、巻首の程偉元序の冒頭に、“紅樓夢小説本名石頭記”とあり、嘉慶・道光年間の刻本も同じく「紅樓夢」となっている。その後光緒年間の版本に「金玉縁」となっているのを知っているが、それ以前の本では「金玉縁」という名を使っているのを知らない。民国初年の有正書局覆印の80回本に、国初鈔本、原本紅樓夢と題をつけているが、これはもちろん「国初」のよび名ではなく、印行に際してつけたキャッチ・フレーズなのだろう。本文第一回到「空々道人，因空見色，由色生情，伝情入色，自色悟空，遂改名情僧，改石頭記為情僧録。東魯孔梅溪題曰風月宝鑑。後因曹雪芹於悼紅軒中披閱十載，增刪五次，纂成目錄，分出章回，又題曰金陵十二釵，並題一絶，即此便是石頭記的縁起。」と、小説の本文としては、少し変った一節があるが、「情僧録」という名は、あまり使われていない。それにこの文章から見ても、「石頭記」を結局「情僧録」と改めたのか、改めないのか、はっきりしない。なお、清末民初の流行本に、ことさらに「紅樓夢」という名を避けて、「石頭記」または「金玉縁」の名を使ったと察せられるもの、例えば上記の“紅樓夢小説本名石頭記”をその部分だけ“石頭記是此書原名”と書き直しているようなものがあるが、どういうわけ

なかわからない。この本は従来しばしば禁書になったことがあるので、そんな関係からかも知れないと思うが、はっきりいうことはできない。それで80回抄本においては「石頭記」という名が使われていたが、120回本が出るに及んで「紅樓夢」という名がつけられた。そしてその後この二つの名が並用されている。陳独秀が重東本新序に、石頭記と呼ぶ方がいいといっているのは、それが古くからの名であるからであろう。後年さらに「金玉縁」など別名を用いるものもあったと判断して大過ないであろう。「紅樓夢」とはもともと第5回に出てくる「紅樓夢12支曲」の名であるが、この曲が全篇を貫く宗旨であるとみたところから、程偉元、高鶚が120回本を作ったときに、正式の書名として採ったのであろう。それ以前に「石頭記」の別名として使われたかどうかはわからないことである。現在では「紅樓夢」の方が正式の名称になってしまった。

名については、これだけであるが、つぎにわたしのどうしてもとけない疑問を一つ、もち出しておきたい。それは、この小説がどうして日本で読まれなかったかということである。もちろん明治以前のことである。中国の小説についての語彙集のようなものも、たくさん作られており、そのなかには読まれた限りのものはどんなものでも出て来るので、中国の小説がかなり小さいもの、つまりらぬものまで読まれていたことが、窺い知られるのであるが、不思議に紅樓夢の名が見えない。戦前、わたしは長崎へ行って、各所に残っている記録・文書について江戸末期舶載の書目を調べたことがあるが、孟子はあっても紅樓夢はなかった。ただ田能村竹田の屠赤瑣々録卷三に「紅樓夢に記したる川堂とはおもて座敷にて……」とあることを、人に教えられたことがある。とすればやはり読んだ人もいるらしいが、然らば他の小説とちがって、どうして語彙集にすら名を出していないのか。これはわたしには、いくら考えても、仮定すら立てることができない不思議である。しばらく記して大方の教示をまつわけである。

## 一 紅樓夢の版本

文献を渉猟し、文献いじりに終始するような研究態度は反省されなければならないが、古いもの、ことに版本の雑多なものについては、少くとも、どんな本があり、どの本が比較的にすぐれているかぐらいのことは、基礎的な仕事として調べておかなければならない。紅樓夢の版本については、胡適と俞平白に、それぞれ考証があるが、論争以後も版本問題はあまり論議されていないようである。俞平白が脂硯齋本について、若干の見解を述べているのが目につくぐらいであるが、版本問題はまだまだ問題が残っていると思う。

紅樓夢には定本と認められるものはない。現存の版本を年代順に並べてみると、次のようにな

る。まず抄本では、

1. 乾隆甲戌（19年，1754年）脂硯齋重評本（1—8，13—18，25—28の各回，合計16回分だけ）
2. 乾隆己卯（24年，1759年）脂硯齋重評石頭記四閱評過本（1—20，31—40，61—70の各回，但し64・67両回は抄配，合計38回）
3. 乾隆庚辰（25年，1760年）脂硯齋重評石頭記四閱評過本（64・67両回を欠いて80回）
4. 乾隆甲辰（49年，1784年）夢覺主人序本（80回）
5. 乾隆己酉（54年，1789年）舒元煒序本（1—40回？）
6. 年代不明の殘卷（23・24の両回）

ということになるらしい。1は胡適旧蔵本で現在は北京図書館に保存，2は俞平白蔵（？）3は徐星曙旧蔵，はじめ燕京大学に寄託されて，現在は北京大学蔵になっている。4は俞平白蔵（？）5は呉曉鈴蔵，6は鄭振鐸蔵となっている。写本のことであるから，もちろん一本しかなく，3の庚辰本の欠けている両回を己卯本で補った

7. 脂硯齋重評石頭記（文学古籍刊行社，影印本，80回，1955年4月版）

これを除いてその他は，何れも見ることのできないものである。但し脂硯齋紅樓夢輯評（俞平白輯，上海文芸聯合社，中国古典文学研究叢刊，1954年12月版）があり，脂硯齋各種本の評註の部分だけは窺える。刻本類としては、

8. 乾隆辛亥（56年，1791年）程偉元，高鶚第一次木活本紅樓夢（120回）
9. 乾隆壬子（57年，1792年）程偉元，高鶚第二次木活本紅樓夢（120回）
10. 道光壬辰（12年，1832年）王希簾評刻本紅樓夢（120回）

が重なものであり，8は胡適のいわゆる程甲本，9は程乙本である。なお，9と10の間に例えば嘉慶年間に版になっているものもあるが，8の覆刻本と見るべきものである。またこれら嘉慶・道光版には何れも後刻本がある。

清末から民国初年にかけては，刻本，石印本，鉛印本各種あるが，それらは何れも10道光本を底本としたものであり，大某山人（姚梅伯，鎮海人）加註（咸豐年間）のものなどに，特色を見るだけである。最近重印本が出ている万有文庫版石頭記（商務印書館）は，その一種である。ただ

11. 戚蓼生序本紅樓夢（民国初年有正書局石印，80回）

は注意を要する。国初鈔本，原本紅樓夢の複刻と称するが，大字本と小字本があり，小字本は後出のもの，その底本は焼失した由で不明である。胡適によれば，乾隆時代に無数にあった次々と転写された写本のうち，幸いに保存されたものであろうとするが，俞平白はさらに一步進めて，脂硯齋評本の一つで，3と4との間に入るものであろうという。何れの説をとるにせよ，清初抄

本の複製であると認めるならば、7と共に、抄本の面目を、われわれが見られるものであり、抄本類としよに取扱っていいものである。

民国に入ってから活版本は、亜東本以外は、一々挙げられないし、挙げる要もない。

12. 亜東旧本、紅樓夢（民国10年、1921年、上海亜東図書館版、120回）

13. 亜東新本、紅樓夢（民國16年、1927年、上海亜東図書館版、120回）

12は10を、13は9を、それぞれ底本としている。何れも胡適の考証（改定稿）陳独秀の新序、汪原放の校読後記などを、巻首にのせているほか、13には胡適の重印乾隆壬子本序、汪原放の同上校読記をのせている。

解放後に出たものは

14. 作家出版社本、紅樓夢（1953年、北京、120回）

15. 人民文学出版社本、紅樓夢（1957年、北京、120回）

がある。14は13によったもので、多少の改字はあり、難解の語詞に註をつけた点に特色をもつが、13と大きな区別はない。しかし15は、9を底本をすることは、13、14と同様であるが、10・8・3・11さらに嘉慶本と他に2種通行本を参考にして、底本の誤字などを正したと出版説明にいう。同じく註があるほか、校記を各冊（3冊）の後につけている。実はこの本は、数日前にやっと入手したものであり、内容を詳しく見ていないが、出版説明にいう通り整理が行われているとすれば、亜東本以来の新しい本であるわけであるが、後に述べるように、この底本のとり方、また参考各本については、わたしは多少の疑義をもっている。

なおこのほか、俞平白に「紅樓夢80回校本」というものがあるらしく、その序言がすでに発表されている（雑誌「新建設」1956年5月号）が、本は印行されていないのではないかと思う。少くとも未見である。

大体以上が現存する紅樓夢版本の状況である。さらに例えば茅盾の“潔本紅樓夢”（民國24年、1935年、開明書店版）のような改作本、または簡略本などを捜せば、若干あるが、これらは取り上げないこととする。

さて以上数多い版本のうち、どれをとって定本——少なくとも定本の底本とするかということになると、まず解決しなければならないのは、80回本か120回本かという問題である。120回本は8の乾隆辛亥、程偉元、高鶚第一次木活本にはじまる。それ以前の手写本は何れも80回である。そして後40回については、程偉元が右の本の序に、“原本の目録は120巻あるのだが、いまは80巻しかない。目録があるのだから、全体がないはずはないと思い、極力捜して、蔵書家の蔵書から紙くづ籠まで気をつけていて、数年以来やっと二十余巻集めた。そこへある日たまたま街のくず屋が

十数巻もっていたのを、高い金を出して買い取った。これで見ると話の筋は大体通るのだが、散漫で何ともならないので、友人と協力して整理を加えて、出版した。石頭記全書はここにおいて完成した。” といっているにもかかわらず、原来80回しかなかったものを、高鶚が後40回を続作し、併せて120回としてこの本を作ったものと認められている。紅樓夢全篇の作者については、後に改めて考えてみたいが、高鶚が前80回を承けて後40回を書いたとすれば、後40回はいわば一種の続書である。続書であるからには、当然本書とは分けて取扱わねばならないので、よしんば前80回が未結末の形であっても、それはやむをえない。ことに内容的に見てかなりの遜色があるし、また、程・高両人は後40回をつけ加えただけでなく、前80回にも手を入れているから、程・高本は原作をかなり傷つけているといわねばならない。それでやはりそれ以前のもの、すなわち脂硯齋80回本に帰らねばならない。というのが俞平白の主張であった。胡適は、後40回が高鶚の補作であることを認めながらも、“不能不佩服高鶚の補本了。我們不但佩服，還應該感謝他，因為他這部悲劇的補本，……居然打倒了後來無數的團圓的紅樓夢，居然替中国文学保存了一部有悲劇下場的小說。”（胡適：紅樓夢考証）といつて、程・高本を高く評価し、程高本二種のうち、9乾隆壬子本は、辛亥本を改訂したものであるから、比較的に優れているとする。従つて彼のとる底本は、乾隆壬子、程・高第二次木活本である。

さらにこの続書問題については、紅樓夢論争をひきおこした二人の青年、李希凡・藍翎の“紅樓夢后四十回為什麼能存在下来”という文章がある（文芸月報、1956年6月号）。この論文は、どうやらその前に発表された、俞平白の“八十回校本序言”（新建設、1956年5月）に対して書かれたものらしいが、“高鶚の続作は、作者の世界観の制限を受けて、前80回の社会的意義を弱めたが、話の中心である宝玉黛玉の恋愛悲劇については、比較的合理的な発展と結末を与えており、基本的には前80回の悲劇的雰囲気と性質を保持している。そこで、後40回は芸術的吸引力を発揮し、前80回と一つになって伝つて来たのである。”という。俞平白が後40回を、前80回と一つに取扱うことに、少くとも消極的である理由は、後40回の内容についての評価もあるが、主たる理由は、この乱雑な紅樓夢各種版本を整理して、「原作者」曹雪芹の原作の面目を、できる限り回復したい。すなわち、紅樓夢を曹雪芹に返せというにあるようである。してみると、「曹雪芹の原作」とは、果してどの程度のものであるかということが、問題に上ってくるが、それはともかく次のこととして、紅樓夢は事実において120回であることを、われわれは承認しないわけには行かないのではなからうか。紅樓夢は120回として通行して来た。その理由は李・藍のいう通り、前80回と後40回が、大きな破綻を見せないで、首尾一貫していたことが、根本的な理由ではあろうが、普及しはじめた最初、すなわち刻本として現われたときから、120回本であったの

で、120回として結末をもつようになったとき、紅樓夢は完成したという、胡適の考え方も充分に理由のあることである。そのために、紅樓夢は曹雪芹・高鶚兩人の作であるとする（最近の人民文学出版社は、作者を2人にしている）のも、よからうし、高鶚の続作は、他の一般の続書——紅樓続夢、後紅樓夢などとは、同一視できない性質のものである。前80回についても、120回本では、曹雪芹以外のものの手が加えられていることを心配するのは、大したことではなかろう、というのは、手写本、脂硯齋本にしても、純粹に曹雪芹だけのものであるという証拠は何もないばかりか、文章・形式の不統一から、少くとも数人の手を通したのではないと思われるようなこと、また筆写の途中における本文と註との混同とも見られるようなこともあり、紅樓夢の「原稿」は当初から決して完成していなかったとしか考えられない。それで未完成のまま伝えられ、後人の補正を待って、だんだん形を整えて来たという方が、妥当であるとわたしは考える。わたしは曾て各種版本について、かなり詳しい校合をしたことがあり、その記録もあるが、要するにある部分においては文章が甚だしく文語的であるのに、他の部分では甚だしく口語的である。しばらくは詩の挿入がかなり目につくかと思えば、しばらくは全然詩が出てこない。前回までの筋の運びをくどくどと説明しているところがあるかと思えば、筋の若干の飛躍にあまり気を使っていないようなところもある。また、最も大きなことでは、開卷第一の少くとも数行は、わたしは註かまたは評語が本文に混入したのではないかと思う。“此開卷第一回也”という書き出しも小説の書き出しとしてはおかしいし、続いての文章も作者以外のもののことばとして見る方が、よりにつかわしい。元来この巻首にいつているようなことは、もし作者が自ら述べるとすれば、本の形式としては、もちろん巻首に来るものではあるが、書く順序からいえば恐らく本文を書き上げてからでなければ書けない性質のものであることは、今も昔も変わらないことであろう。紅樓夢は曹雪芹にせよ、誰にせよ一人の作者の手によって、最初から完成せられたとは認められないので、これは写本転写中に本文に混入した、評者、読者の書きこみではないかと思うのである。同じことは同じ第一回の“後因曹雪芹於悼紅軒中披閱十載……”の箇所についても同じく疑われる。“曹雪芹”というよび方は、自称としてはふさわしくないことでもある。乾隆甲戌本は残本数回でしかないが、現存の一番古い本である。その第一回は冒頭に凡例があり、かなり其後の他本と相違しているようである（脂硯齋紅樓夢輯評参照）。これは「此開卷第一回也」ではじまる其後の本が出来て来るまでを暗示するものではなかろうか。もちろん、これらのことは、今日では仮定としてしかいえないことである。しかし当初本において、ちゃんと整っていたのが、後世になって乱れたという性質のものではないことを、推量することはできる。後世何らかの理由によって乱れた古書を、復原することは大切であるが、だんだんと形を整えるようになって来た



ものを、古い版にかえすことは、必ずしも当を得たことではない。脂硯齋各本のような抄本は、120回本として形を整える紅樓夢を、生み出して来た原型を見せている本として、価値高いものではあるが、この方が紅樓夢の真本であるという考え方には、わたしは同意できない。従って、120回を前80回を乾隆庚辰本をとり、後40回は高鶚の続作をとって、編集するという風な形は、無意味なことであろうと思う。120回をとる以上は、少くとも程・高本以降でなければならない。脂硯齋本などに見る評註が、本文解釈の上に役立つことは、自ら別問題である。

程・高本に8・9の2種類あることは、上に述べた。その共通の性質は、程偉元・高鶚の兩人は、創作者ではなくて、整理者であるというところから出る。すなわちこの本は作者と整理者が、あることである。この本を認めることは、作者が曹雪芹であるにせよ、ないにせよ、とにかくこの二人以外の人が作ったものを、二人が整理したことを認めることであるが、紅樓夢という小説は、その成立においてこうした事情を認めなければならないもののようである。してみれば、次にその整理がうまく行われたかどうかを見なければならない。これを今日において遡って判定することは、たいへんに難しいことである。当時整理に当って、彼らは全く主観的にしたのか、どれかの抄本を校訂したのか、後40回も、高鶚が全く独自の解釈で書いたのか、それとも何らかの筋書のようなものでもあったのか、あるいはいう通り紙くず屋から買ったのが土台になったのか、憶測はいかようにでも立てられる。しかしとにかくそれ以後において、程・高本が広く世に行われ、程・高本が出てからは、も早それ以前の脂硯齋本などは、行われた形跡がないことは、程・高本が高く評価され、一般読者の広い支持を受けたことを物語っているといわねばならない。ところで、この2類の本の相違点は、亜東新版にのっている汪原放の校読後記で、辛亥本の後身である道光本と壬子本を対照しており、これで大体のところは知ることができるが、胡適は壬子本の高鶚の「引言」に、“初印時不及細校，間有紕繆。今復聚集各原本，詳加校閱，改訂無訛。”とあるのによって、壬子本を程・高本の定本であるとして、この本が辛亥本その他を合理的に改正している例を2,3挙げている。しかしながら例えばその1、第2回で賈家の歴史を述べているところで、元春と宝玉の年齢に関して、元春が生れたあと“不想次年又生了一位公子”とあるのは、不合理であり、壬子本ではこれを“不想隔了十幾年又生了一位公子”と直している。この方が合理的であるといっているが、これは必ずしもそうとばかりもいえないことは、俞平白も最近いつている（80回校本序言。もともと俞平白は、脂硯齋本が優れているというためにいつているのである）。他の例も必ずしも絶対的なものではない（胡適：重印乾隆壬子本紅樓夢序参照）。ことに汪原放の校読校記に窺える、両本の相違点は、第一に壬子本は辛亥本の文語的な語詞を口語に直している（若を要に、与を給に、何を為什麼に、如何を怎麼に……の如く）のと、数ヶ所文章

を改めていることであるが、これらの改訂は、果して胡適の認めるほど——この改訂があるが故に9（壬子本）は8（辛亥本）よりも優れているといえるほど、重大な意味をもつものであるかどうか疑いなきをえない。この改訂は、極めて短時間の間に、十分な研討を加えることなくして、むしろ気の赴くまま、主観的に行われたもので、必ずしもある一定の方針をもっていたとは思えず、場所によっては、木活字の制限を受けて、一字を削ったがために、その近くで一字を増さねばならぬというような、無理からぬ無理をした形跡すら指摘される。この改訂は、8の本（辛亥本）を出す時に果せなかった改訂をしたというよりも、初めて完本として出た辛亥本は、印刷されて普及版の形となって、予想外によく売れ、忽ち品切になった。そこで急いで改訂本と称して、この本を作って売ったと見るのが、真相に近いのではあるまいか。不合理を正すというのであれば、辛亥本出版前に、もっと全面的に研討を加えらるべきはずであるし、数ヶ所の文章を変えるだけですむことではない。また文語を口語に変えるのであれば、ただ如何を甚麼に変え、之を的に変える式の、用語の入れ換えだけではもちろん不十分で、表現形式全体からして変えなければならないはずのものである。如何を甚麼に変えることは、後年の胡適の考え方・趣味には合致するかも知れないが、当年程偉元にせよ高鶚にせよ、胡適の考えたような口語文学などということ、考えたはずはなく、その上こういった改訂は古書の校勘ということから、はみ出したことでもある。そこでその改訂は、もっと低い意識から、すなわち広く売るためのことであつたと見られるのである。改訂のあとを調べて、わたしはむしろ改悪・行きすぎではなからうかと思う。そしてそれを証拠づける何よりもものごととして、その後この改訂本（9壬子本）は、ほとんど行われていないことを指摘したい。胡適も改訂本が行われなかったことを認めて、“しかしこの本が出てからも、程甲本（8辛亥本）を翻刻する人があり、最初の矛盾や誤りは、依然として現行各本に残っている。多くの人が批や注で指摘しているが、ついに改められなかった。”といっているが、なぜ“この本が出てからも、辛亥本を翻刻する人があつた”のか、触れていない。それはこの改訂が、承認されなかったことを示しているのではないか。また壬子本が後年行われなかった理由として、一年足らずの間に行われた再度の出版でもあり、出版部数が少なかったからではないかとも、一応考えられるが、現在においてすら、必ずしも稀本というほどでもなく、われわれも見うる程度のものであるから、後年覆刻本を作る人が、手に入れられなかったなどということとは、考えられないことである。後年の刻本に、従来の版本のうちでは、程氏初刻本が、比較的によいといっているのがあるのは、二刻本も見えていたことを物語っていると思われる。こういう考え方から、わたしは120回程・高本2種の中では、最初の8乾隆辛亥本（胡適のいわゆる程甲本）をとる。

乾隆辛亥本から以後、道光壬辰本に至るまでの間の各種刻本は、嘉慶本などわたしの過目した

限り、多少の異同はあっても、全部乾隆辛亥本の覆刻と見ていいものである。そしてその間には校訂らしいことは、何人によっても行われなかったと見られる。10道光壬辰、王希簾評本は、乾隆辛亥本の系統をひきながらも、嘉慶本とは些か異なる。それはただ王希簾（雪香、呉县人）の評がついているというだけでなく、字句の訂正においても、乾隆辛亥本を生かして、よく読んでおり、かなり忠実に校訂したことが窺われる。この本が出てから後は、この本の覆刻本だけが通行して、近年に至った。清末・民初の版本は数種あるようであるが、何れもこの道光本そのままか、あるいはこれに大某山人、姚梅伯などの評を加えたものである（この人の評は特色がある。別に読紅樓夢綱領二巻の著もある）。すなわち、それまでの乾隆辛亥本に代って、この道光壬辰本が、定本として一般に認められたことを示す。でないならば、覆刻本を作るのに、乾隆・嘉慶の版本によることは、さして困難があったはずはないから、道光以後においても、もっと別様の版本が出ていていいはずである。しかも道光本は乾隆辛亥本の忠実な修訂本であるのだから、道光本が広く行われるようになったことは、それまでの紅樓夢の系統を乱すことではなかった。この状態は、民國に入って亜東本が作られるときまで続く。その間民國初年に、11戚蓀生序本が、國初鈔本、原本紅樓夢と銘打って、上海有正書局から印行された。大字本と小字本があることは前に述べたが、小字本は普及版として後に出たものであり、間々錯誤があり、やはり大字本がよいとされている。この本の底本になった國初鈔本とは、一体どの本であるのか、その後焼失したとのことで、ついに不明のままであることも上述の通りであるが、とにかく程・高本以前の抄本であることにはちがいない。ただ現存の各抄本と、かなりの異同があり、それは有正書局が印行の際に手を加えたためか。または底本がそうであったのか、もし底本がそうであったとすれば、それは現存各抄本とまたちがった類の抄本であるわけであるが、只今のところまだ何ともわからない。内容に至っては、各種本と異同の箇所について、どれがいい、この方が合理的であるなどと、主観的判断をすることは、慎むべきであると共に無意味であろうが、この本はいわば身許不詳の故に、一抹の不安を抱かせながらも、どちらかといえば評判のいい本である。しかし、120回以前の本でもあり、参考とするに止めたい。

さて、1921年、亜東図書館本が作られるに際して、底本として道光壬辰本が取り上げられたことは、当然のなり行きであった。ところが、恐らくは胡適の主張の故と思うが、1927年その改版が行われて、9乾隆壬子、程・高第二次排本を底本とする、亜東新本が作られた。紅樓夢に限らず、亜東図書館本が、近年における旧小説普及に、大きな功績があったことは、大いに認めなければならないし、これについての胡適の貢献は過小評価すべきではない。しかしながら、この紅樓夢本の改版は、果してどんなものであろうか。9乾隆壬子本については前に述べたが、何より

も困るのは、この本は整理者程偉元・高鶚（二人でやったとして）が、整理の範囲を逸脱して、ほしいままな改訂を行っていることである。これは従来の系統を乱してしまうことである。こういう整理のしかたを認めるならば、いっそわれわれの手で、もっと合理的に改めることすらできるのであり、程・高の場合は許されるが、後人の場合は許されないということは、それこそ不合理であろう。それが、矛盾の潔本紅樓夢式のものを作るのならば、それはまた別問題であるが、紅樓夢そのものとしては、整理は必要ではあるが、自らそこに一定の限界があるはずで、古書の整理を行うのに、主観的な判断だけで、手を加えることは許されないことであり、わたしには、この壬子本はせいぜい異本としてしか認められない。胡適が乾隆壬子本をとる理由は、垂本新本巻首の重印乾隆壬子本紅樓夢序に詳しいが、この本が“高鶚の整理した前80回と改訂した後40回の最後の定本”であるということについては、十分な説得をしていない。しかしながらこの垂東新本が出てからは、それが旧小説普及に功績と権威をもつ垂東本であり、また胡適であるが故に、最も信頼のできる本の如くに取扱われて来た。それがためか、解放後出版された14作家出版社版本も、胡適の名は出さないでいるが、胡適の考証をそのまま受け入れて（出版説明）、垂本新本そのままの内容になっている。この点においては、最近出版された15人民文学出版社本は、作家出版社本に、さらに整理を加えたといっているから、若干の期待がもてる。しかしわたしの期待は若干に止まるというのは、この本が依然として乾隆壬子本を底本としていることと、それから底本の誤字を正すために参対した重要な版本として 1. 王希廉本 2. 金玉縁本（通行本） 3. 簾花樹本（嘉慶本） 4. 本衙蔵板本（嘉慶・道光間刻本） 5. 乾隆辛亥程・高本 6. 脂硯齋庚辰本 7. 戚蓼生本をあげていることである。前者については、重ねていうまでもないが、後者については、この数種の本が壬子本を校訂するために、どういう見地から選ばれたのかという疑問が起る。見渡したところ、甚だ隨便な選択のようであるが、これでは意味のある校訂はできないのではなかろうか。壬子本（胡適の垂東新本でなくて）を底本とするならば、辛亥本及び脂硯齋本その他できうる限り多くの抄本を詳しく当ることが、まず何よりも大切なことである。その場合上の1-4は恐らくあまり役に立たないはずである。しかし、前にも述べた通り、この本はわたしは数日前に、やっと入手したばかりであり、詳しく見ていないので、これ以上の批評は差し控えよう。

以上で大体紅樓夢各種版本について述べた。要約すれば、

1. 紅樓夢は元来不完全なものであった。後来何らかの理由で散欠して不完全になったのではなく、80回までは一応形がついていたが、そこで中断し、以後未完成のまま、好事家の間に写本の形で伝った。脂硯齋本各種など現存の80回抄本は、何れもその当時のものである。

2. 程偉元・高鶚によって、前80回の整理と後40回の続作が行われ、120回完結本が作られ、

はじめて刻本となり、飛躍的に流布した。これによって「紅樓夢」は、はじめて完成した。「紅樓夢」はその名がこの本で初めて正式に用いられた如く、その本もここで成立したと見るべきで、これ以前のものは「紅樓夢稿本」である。従って乾隆辛亥本は、最も古い紅樓夢となる。

3. その後流布する間に、多少の異本ができた。乾隆壬子本は同じく程・高の手によるものであるが、整理の行きすぎがあり、とらない。その他嘉慶本その他辛亥本の覆刻と見られるものが行われたが、時日の経過と共に、若干の混乱が生じたようである。

4. 結局、道光壬辰本が、乾隆辛亥本を改めて校訂確認したことにより、紅樓夢の形は一応落着き、以後はこの道光本が主として行われた。

5. 垂東新本で胡適が乾隆壬子本を推賞して以来、その追随者が多くなったが、壬子本は抄本以来の紅樓夢の系図からは外れるものである。しかし解放後もなお主たる底本として、壬子本が用いられている。

かくて紅樓夢版本についてわたしの到達した結論は、現存版本の中で底本として取るべきものは、道光壬辰本である。それは抄本以来の正しい系統にのるものであり、乾隆辛亥本を正したものであり、また最も多くの人に承認せられて来た本だからである。この本はいわゆる通俗本の本家である。それに時代も比較的近い。しかしそれらのことは決してこの本の価値を低くすることではない。一方、古い版本は古いということだけで、しばしば信頼されるが、それは意味のないことであり、また新古各種の本を読み合せて、「合理的」と考えるところを、綴り合せて定本を作ることは、全くナンセンスである。なぜならその紅樓夢はいかに「合理的」であっても、かつて存在したことはないのだから。

わたしは底本として道光壬辰本をとるが、しかしその中に、あるいは無作為の誤りもあろうし、誤排字もあろう。それを正すために、さらにその底本である乾隆辛亥本を第一に、壬子本、嘉慶本は有力な材料となるであろうし、脂硯齋本など抄本も参考せねばならない。この校訂工作によってできるものが、わたしの期望する紅樓夢の定本である。 (1957. 11. 30)